

【社会】

実践事例：小学校4年生 / 実施機関：大館市教育委員会

●教科における学習上の予想されるつまずくポイント

- 1 資料の種類や量、情報量が多い。視点、着眼点がずれやすい。
- 2 複数活動の同時処理、あるいは多様な情報を同時に入力することが求められる。
- 3 体験・見学したことを、知識や技能へ汎用する。
- 4 1時間の授業で取り組む活動（読み取る、書く、話す、話し合う）や形態（個・ペア・グループ・全体）が多様で時間のゆとりがない。
- 5 電子黒板や映像資料はインパクトがあるが、瞬時に切り替わるため理解が追いつかない。
- 6 多様な学習活動、学習形態で構成されていることで、活動のみに没頭し、本時の課題、目的を見失う。
- 7 秋田の探究型授業の流れは大きな問いで45分が構成されるため、問題意識が拡散しがちである。
- 8 曖昧な発問、漠然とした本時の課題が分かりづらい。

【指導例1】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

- 自閉症 情緒障害 LD（学習障害） ADHD（注意欠陥/多動性障害）
 その他

(2) 子供の困難さ

- 見ること 聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと 動くこと
 コミュニケーションをすること 気持ちを表現すること
 落ち着くこと・集中すること 概念（時間、大きさ等）を理解すること
 学習（計算、推論等）すること その他

- ・ノートへの書き写しが苦手であり時間を要する。
- ・質問への反応が遅く、話す速度もゆっくりである。
- ・話を聞いていないことがあり、理解が不十分で他より遅れて行動する。
- ・できないことを気にしており、自信がもてず、時になげやりになりがちである。

2. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

平成31年3月、令和2年4～6月

(2) 実態把握の方法（実施者・方法）

心理検査（臨床心理士）

授業観察（運営協議会委員、調査研究員）

「学習場面のつまずき」聞き取りチェックシート（学級担任・通級による指導担当）

日常の観察、単元テスト等の判断（学級担任）

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまずきの内容

- ・書く作業を時間内で終えて、次の活動に移ること。
- ・資料を読み取って、自分の意見をまとめる、話すこと。
- ・グループでの話し合いへ参加すること。

(2) つまずいている背景・原因

- ・「見る」と「聞く」、「見る」と「書く」、「聞く」と「考える」の同時処理が難しい。
- ・複数の資料（図・絵・写真・グラフ等）からの情報入力が難しい。
- ・言語理解・知覚推理に比べて、ワーキングメモリ・処理速度が低い。
- ・数的処理能力が低い。聴覚的短期記憶が弱い。
- ・言葉数が少なく、多面的に考えることが難しい。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

- ・座席を前列中央とし、全体指示後は個別に説明し取り組み始めたことを確認する。
- ・個の活動の場面では、学級担任や特別支援教育支援員が、本児童への個別指導を行う。

<問題意識の喚起>

- ・資料提示の工夫～「音声資料」の電子黒板と「文字資料」学習シートを併用する。状況によっては、担任による説明。
- ・本児童の取りかかりやすい資料を限定して、自分のペースで考える時間のゆとりをもたせる。
- ・指示内容や課題に視覚的な手がかりを用いる。

<予想・見通し>

- ・教師から例示を示したり、周りの児童の様子を見せたりしながら、取組を促す。
- ・資料の情報量を制限したり、見通しをもたせたりする。
- ・書く量を減らしたり、記入しやすいシートを用意したりする。

<個の学び>

- ・話の内容・重要なポイントが理解できているか個別にこまめに確認し、簡単な意思表示をしてもらう。
- ・本児童の経験や生活と結び付けるなど具体性をもたせながら助言する。
- ・見学や調査の体験を想起させ、聞き取った内容をノートにキーワードで記入させる。

<グループでの話し合い>

- ・グループ内の役割を軽減させ、課題に添った思考に重点をおいて取り組むようにさせる。
- ・自分と社会とのつながりを意識させ、自分の立場で考えさせる。
- ・話し合いは、事前にテーマを予告して、考えをメモして参加させる。

<まとめ・振り返り>

- ・まとめや振り返りの書き出しの言葉や使うキーワードを示す。
- ・振り返りの視点の例示は、常時、掲示し、その中から選択できるようにする。
- ・成長の実感が伴う振り返りとなるよう、教師や同じグループの児童からの評価を伝える。

(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

- ・既習事項や板書の写真を事前に渡す。（前時の想起・予告）

- ・通級指導教室では先取り指導、ビジョントレーニング、聞き取りアップ練習を行う。
- ・生活場面でも自分ができるようになったこと、成長したことを振り返ることで成長を自覚させる。
- ・学級担任による休み時間、放課後の補充学習。

(4)(3)の効果・評価（児童生徒の様子や変容及び授業の評価）

- ・本児童が、日々の生活の振り返りで「行動がだんだん早くなってきた」「先生の話聞きながら勉強できるようになった」と自分の変容を評価している。
- ・通級による指導での自分の成長を振り返ることや学級での日常生活や他教科での振り返りの継続によって、自信と意欲が高まっている。保護者とのこまめな連絡、実践することの共有をすることで、家庭でも言動に変化が見られるとのお礼の言葉があった。

【社会】

実践事例：中学校3年生 / 実施機関：大館市教育委員会

●教科における学習上の予想されるつまづくポイント

- 1 分野によって興味や関心、レディネスに個人差が大きい。
- 2 個々の知識、生活経験によって意欲や発言回数に差が出る。
- 3 本時のねらい、課題提示、発問の曖昧さに見通しがもてない。
- 4 資料の種類が多様。教科書、資料集、地図帳の文字量や情報量が多い。
- 5 複数の事象、資料等を結びつけて考える。
- 6 新出の用語が多い。漢字での読み書きが困難。
- 7 学習内容と自分の生活との関連が見えづらい。
- 8 「分かった」「できた」の自覚、自己評価がしづらい。
- 9 座学中心になりがち。

【指導例1】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

- 自閉症 □情緒障害 □LD（学習障害） □ADHD（注意欠陥/多動性障害）
□その他

(2) 子供の困難さ

- 見ること ■聞くこと □話すこと □読むこと □書くこと □動くこと
■コミュニケーションをすること ■気持ちを表現すること
■落ち着くこと・集中すること ■概念（時間、大きさ等）を理解すること
■学習（計算、推論等）すること □その他

- ・プリントや学習道具が整理できない。
- ・発問の理解が難しく、授業中、特に思考の場面、話し合いでは主体的に参加できない。
- ・課題を自分事として捉えることが難しい。
- ・作業の取りかかりに時間がかかる。
- ・集中が続かない。

2. 教科における学習上のつまづきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

令和2年10月～令和3年1月

(2) 実態把握の方法（実施者・方法）

心理検査結果の分析（臨床心理士）

「学習場面のつまづき」聞き取りチェックシート（学級担任・通級による指導担当）

授業観察（運営協議会委員、調査研究員）

日常の観察、定期テスト等の判断（学級担任・教科担任）

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまづきの内容

- ・教師の指示や説明、周りの生徒の発言内容を理解すること。
- ・新出の用語、専門的な用語の理解や覚えること。
- ・自分の考えをまとめて発表すること。

(2) つまづいている背景・原因

- ・一時記憶が弱く、一度に聞いて覚えられる情報量が限られる。
- ・言葉が意味する内容や性質を考える力や言語を使って推論する力、言葉をつないで説明する力が弱い。
- ・言語による知識習得が少ない。
- ・聞いて覚えることが苦手である。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

- ・チャイム前学習（クイズ形式の簡単な問題）で前時を想起し、心のウォーミングアップを図る。
- ・学習の流れ、まとめ方は黒板に常時掲示する。

< 単元構想 >

- ・生活経験や知識の差を減らすために、模擬裁判や評議の体験等アクティビティを取り入れる。
- ・単元の中で、書く・聞く・話し合う・体験する活動に軽重をつけ、主活動では時間を保障する。

< 話合い >

- ・スモールステップのA Lで段階的に思考を深める。（①制度に賛成か反対か②制度導入後は良くなったか、悪くなったか③自分がその立場なら参加するか、しないか）
- ・全教科で約束事（発表の仕方、グループ学習の進め方、役割分担）や学習のルールを共通実践して定着させる。
- ・既習事項や学習経験を具体的に想起させ、話合いの仕方や視点がずれないようにする。

< まとめ・振り返り >

- ・元担任からの自らの体験にまつわるメッセージによって、学習内容がより具体性を増し身近に捉えられるようにする。
- ・授業の流れ、思考の流れに沿った一方向の板書、ホワイトボードで、視覚的に本時を振り返ることができるようにする。

(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

< T 2による本生徒の困難さに応じた個別指導・支援 >

- ・全体での説明や課題の指示の後に、視覚的な資料や例示を補助的に利用する。
- ・課題が複雑、量が多い場合には、「ここまで」と区切って取り組ませ、できたことを確認して次を指示する。
- ・複数の資料から本生徒が取り組みやすい資料を限定し、注目する部分を示す。
- ・キーワードや新しい言葉はカードにして、何度も復習して学習内容を想起させ、定着させる。

(4) (3) の効果・評価（児童生徒の様子や変容及び授業の評価）

- ・周囲の様子を見て、真似ながら課題に取り組んでいる。
- ・他の生徒が本生徒の発言を肯定してから発言をつなげてくれることから安心して話合いに参加している。

- ・リレー発表では周りの生徒の意見をなぞって、それに対する自分の意見を加えて発表するなど、慣れた話型を活用することで自信をもって発表している。
- ・周りのペースについていこうと努力している姿が見られる。
- ・二択で自分の立場を決める設定により、同じ立場の生徒の意見を参考にして、自分なりの考えをもって話し合いに参加できるようになった。
- ・T2が、難しい言葉は説明したり、思考や作業が停滞した時にとりかかりを指示したりすることで学習への抵抗感が減っている。

【理科】

実践事例：小学校6年生 / 実施機関：大館市教育委員会

●教科における学習上の予想されるつまづくポイント

- 1 複数の活動の同時処理、あるいは多様な情報を同時に入力することが求められる。
- 2 実験や観察など説明や指示を理解する。手順を理解する。
- 3 板書や掲示、資料等による情報量が多い。
- 4 分野によっては学習する事象が、自分の生活や体験と結び付きにくい。
- 5 実験や観察の結果を記録する、まとめる。(グラフや表、絵や図、文章など)
- 6 実験や観察から分かったことを適切な言葉や文章で表現する。
- 7 特別教室の環境による普段の教室と違った刺激、雰囲気。
- 8 グループ単位での活動が中心となる。
- 9 危険が伴う実験で慎重さに欠ける。

【指導例1】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

- 自閉症 情緒障害 LD (学習障害) ADHD (注意欠陥/多動性障害)
 その他

(2) 子供の困難さ

- 見ること 聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと 動くこと
 コミュニケーションをすること 気持ちを表現すること
 落ち着くこと・集中すること 概念(時間、大きさ等)を理解すること
 学習(計算、推論等)すること その他

- ・集中を継続するのが難しい。暇があると別な事に意識がってしまう。
- ・全体への一斉の指示、複数の指示を理解し行動するのが難しい。
- ・自分なりの考え方ややり方にこだわる。
- ・テストで記入漏れなどケアレスミスがある。
- ・整理整頓や物の管理が苦手である。

2. 教科における学習上のつまづきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

令和2年7～令和3年2月

(2) 実態把握の方法(実施者・方法)

授業観察(運営協議会委員、調査研究員)

「学習場面のつまづき」聞き取りチェックシート(学級担任・通級による指導担当)

日常の観察、単元テスト等の判断(学級担任・教科担任)

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまずきの内容

- ・複数の指示を理解して、実験や観察に取り組むこと。
- ・実験や観察の結果を絵や図にまとめること。
- ・テストは、記入漏れなどのミスがあること。

(2) つまずいている背景・原因

- ・同時処理ができない。
- ・興味あるもの、事にすぐ意識がいつってしまう。
- ・言語による説明の理解が難しい。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

- ・動的な活動と静的な活動を組み合わせたり、活動の場を変えたりして集中できるような授業の流れにする。
- ・待ちの時間を作らないように、先々に活動の予告をする。
- ・話を聞く時には、作業を一旦やめるなど学習のルールを他教科でも徹底する。

<問題意識の喚起>

- ・興味を引く実物や実験を提示して、本時で何をするのか直感的に分かる工夫をする。
- ・気付きを発言させたり、演示の助手をさせたりして、導入で活躍の場をつくる。
- ・教師による指示や説明は、一つずつ確認しながら取り組ませる。

<予想・見通し>

- ・実験の手順を前時の実験計画で確認したり、モデリングしたりと条件制御する。
- ・教師の一方的な説明にならないよう、児童と問答しながら大事なことや理科的な用語を引き出す。
- ・「どんな」「どのように」を問う場合には、三択のヒントを提示する。
- ・グループを巡回しながら、個別に声をかけ理解状況の確認をする。

<観察や実験>

- ・全体での演示やモデリングをしてから、取りかかるようにする。特に、危険が伴う場合には、注意事項を教師が実演することで気付かせる。
- ・直感的に物事を捉え反応が早い良さを生かして、活躍する場面を意図的に設ける。
- ・実験道具は、個人か小グループに1セットを準備し、全員が触ったり操作したりできるようにする。

<考察・話し合い>

- ・書く、話し合うなど活動の順番ごとに1度に一つの指示で進めさせる。
- ・実験や観察結果をまとめる時には、必ず使う用語をキーワードとして提示する。
- ・やり直しのできない実験等は、タブレット型端末で録画して繰り返し確認させる。
- ・語彙が少ないことから、程度を表現する言葉を例示したり、量や程度を数値化して表せるようにしたりする。

<振り返り>

- ・学んだことを実生活と関連づけられるように、理科の学習以外の物を活用したり、実験を提示したりして次時の意欲、問題喚起につなげる。
- ・全体が車座になって挙手無しで発言し合うミーティング形式で振り返りをする。

(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

- ・放課後の補充指導
- ・家庭学習での復習を計画させ、体験や活動と知識を結び付ける。
- ・生活で既習内容と関連する場面があった場合には話題として取り上げて想起させる。
- ・生活場面で、専科指導教員や学級担任、管理職が学習した内容や理科の用語を確認する。

(4) (3)の効果・評価（児童生徒の様子や変容及び授業の評価）

- ・45分の授業に様々な場面転換があったり、実験が複数行われたりすることで、集中が途切れることがなくなった。逆に、直感的に捉えた発言が全体へのヒントになったり、誤答であった場合にも全体の思考をゆさぶるきっかけになったりした。周りの児童が本児童に説明したり教えたりする場面が生まれ、理解している児童にとっても学びを確かにすることにつながった。
- ・授業のねらいからそれることなく取り組めるようになり、周りの児童からも認められる場面が多くなった。他の生徒とのトラブルが減った。

【理科】

実践事例：中学校3年生 / 実施機関：大館市教育委員会

●教科における学習上の予想されるつまづくポイント

- 1 複数の情報を統合して考えを整理する、関連づけて表現する。
- 2 同時に複数の課題を処理する、あるいは多様な情報を同時に入力することが求められる。
- 3 決められた時間内に、予想や結果の整理をする。
- 4 抽象的な概念を理解する。
- 5 分野や単元によって、興味や関心の差がある。
- 6 実験や観察には積極的でも、知識として定着しづらい。
- 7 板書をノートに写す。ノートを整理する。
- 8 特別教室の環境による普段の教室と違った刺激、雰囲気。
- 9 グループ単位での活動が中心となり、司会や記録等の役割を担当する。

【指導例1】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

- 自閉症 情緒障害 LD（学習障害） ADHD（注意欠陥/多動性障害）
 その他

(2) 子供の困難さ

- 見ること 聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと 動くこと
 コミュニケーションをすること 気持ちを表現すること
 落ち着くこと・集中すること 概念（時間、大きさ等）を理解すること
 学習（計算、推論等）すること その他

- ・ルールや指示を守ることが難しく、つい、違うことをしてしまう。
- ・活動的な作業を好むが、じっくりと落ち着いて取り組むことが苦手である。
- ・指示や説明を最後まで聞かずに取りかかってしまう。
- ・絵や図を好むが、文字や文章での理解や表現が難しい。

2. 教科における学習上のつまづきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

令和3年7～11月

(2) 実態把握の方法（実施者・方法）

授業観察（運営協議会委員、調査研究員）

「学習場面のつまづき」聞き取りチェックシート（学級担任・通級による指導担当）

日常の観察、定期テスト等の判断（学級担任・教科担任）

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまづきの内容

- ・言語や文章で表現をすること。
- ・積極的な参加態度に反して、定期テストでは点数がとれないこと。
- ・量の多い板書を写す、ワークシートに予想や考察を文章で書くこと。
- ・グループの話合いで、視点に沿った発言をすること。
- ・問題意識、課題への集中の継続が難しいこと。

(2) つまづいている背景・原因

- ・問題文等の文章を読み取って、意図に沿った解答を書くのが難しい。
- ・指示や説明を最後まで聞かずに取りかかってしまう。
- ・言語による理解、知識習得が苦手である。
- ・衝動性があり、じっくり取り組むことが苦手である。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

- ・チャイム前学習で前時を想起したり、単元で使うキーワードを確認したりする。
- ・学習のルールは常時掲示する。
- ・聞く・書く・話す活動は一旦制止して、一つの活動に集中できるようにする。
- ・黒板には、学習の流れを「50分ものさし」として掲示する。全教科、全教室で共通実践し、生徒が学習の見通しをもって参加できるようにする。
- ・「学美ツアー」として生徒が他学年の授業参観をすることで、おおだて型授業の学習スタイルをイメージさせる。
- ・聞き方・反応の仕方を徹底し、共感的で安心できる学級の雰囲気大切に作る。

<問題意識の喚起>

- ・提示する資料や実験が見え、集中できるよう教室前面に集合させる。
- ・実物・写真・映像資料を提示し、生徒との掛け合いの中から意見や考えを引き出す。
- ・キーワードや理科的な用語は、カードにして繰り返し確認に活用する。
- ・自分と学習内容との関連をまとめる考察、振り返りの視点を掲示しておく。
- ・黒板前に集合するなど、目的に応じた場の使い方をする。

<予想・見通し>

- ・言葉での確認以外に、フロー図で作業や思考の順序、役割などを示す。
- ・シートに自分の考えを書く場合は、使ってほしいキーワードや書き出しの言葉を示す。
- ・直感的につぶやいた発言で良い意見は取り上げ、不要な発言は聞き流す。

<実験・考察>

- ・検証方法やプリントなどは選択できるように複数用意する。
- ・グループ活動ではリーダーなどの役割を与えて、主体的に取り組めるようにする。
- ・グループでの活動にすることで、周りの生徒から具体的に教えてもらったり、声をかけてもらったりできる環境にする。
- ・賛成など自分の意思や意見をハンドサインで表明させる。

<まとめ・振り返り>

- ・まとめは穴埋め式のシートを準備し、書く負担を減らす。
- ・机間指導をしながらまとめを聞き取り、出来ていた時はノートに花丸や言葉で認め、全体での発言を促す。
- ・振り返りの視点を示し、どのような内容を書こうとしているか話させてから記入させる。

(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

＜T 2による本生徒の困難さに応じた個別指導・支援＞

- ・グループ活動では、課題から逸れないように、随時声をかける。
- ・書く活動では、何をかけばいいのか具体的に説明する。または、書こうとしていることを先に話させてから記入させる。
- ・早合点してすぐ行動に移すので、落ち着くよう促す。
- ・個の活動では、T 2が全体を机間指導し、T 1が対象の生徒に個別に指導するなど状況に応じて役割を交代する。

＜教科担任による個別指導＞

- ・教科相談、長期休業中の補習授業

(4)(3)の効果・評価（児童生徒の様子や変容及び授業の評価）

- ・問題意識を継続させることにより、本時の学習内容から大きく逸れることがなく、課題に向かう時間が長くなっている。
- ・持ち前の積極性を生かしてグループではリーダー的な役割を果たしたり、授業のムードメーカーとしても良さを発揮したりしている。
- ・なにげなく口にした発言でも、教師が問い直しをすることによって課題に迫る思考を促すことができている。